

# Air Force V

## Hifi news 誌 2019 年 1 月号 Air Force V レビュー

レビュー Ken Kessler

実験レポート Paul Miller

### TechDAS Air Force V

誰も予想していなかったことが起きた。

TechDAS が驚異的な Air Force III に続いて、さらに価格の安いエアベアリング・バキューム吸着ターンテーブルを出したのだ。

Air Force V に祝福をあげると同時に、レビューができることを大変喜ばしく思っている。

是非レビューをお読みいただきたい。

### 祝うべき理由

12,500 英国ポンドの TechDAS 最新ターンテーブル Air Force V は、Air Force One の 10 分の 1 の価格だ。ここをもう一度読み直して欲しい。つまり本物の最高級ターンテーブルを所有するという荣誉が、90%も値下がりして可能になったのだ。そして、その価格で 90%のパフォーマンスが手に入るのだ。

TechDAS シリーズは精神的先祖というべき 1970 年代 1980 年代の名品マイクロ精機を彷彿とさせる構造とエアサスペンション、バキューム LP 吸着、エアベアリングを採用しハイエンドターンテーブルの水準を上げてきた。伝説のマイクロ精機ターンテーブルを作った設計者の西川英章氏は、あっという間に 4 モデルのフルレンジを出した。(Air Force IV は存在しない。4 という数字は、東洋では不吉な数字だとされている)加えてハイエンドステータメント機 Air Force Zero が来年出る予定だ。Air Force V の発売によりこのテクノロジーが、より多くのレコードユーザーの手に届く範囲に限りなく近づいた。

### 余計なものはない方が良く

TechDAS の機種名では数字が大きいほど価格が安くなるが、(略して)AF III に外観が似た(略して)AF V は明らかにコスト軽減の配慮だとわかる。しかし軽減箇所は、内部モーターの 1 点のみだ。それだけでは約 17,000 英国ポンド低くなった価格は説明できない。この不可解な秘密を探るため、直接メーカーに問い合せたところ、西川氏はしっかり説明してくれた。

# TechDAS

hifi news review

# Air Force V

“最大の違いは AF III ではモーターが別筐体であるのに対し AF V は本体に組み込まれていることです。また AF III の本体は無垢のアルミですが AF V では切削アルミ板を組み立てたものです。さらに AF III の無垢のマツシブなブラッターに対し AF V はメイン/サブブラッター方式です”

トーンアームなしで 12,500 英国ポンドという価格に、レコードクランプや 3 個までアームボードを追加することもできる。なんでトーンアームを 4 本もつけたいのかと不思議に思うかもしれないが、レビューである私にとってそんな自由は憧れた。アームやカートリッジを評価する際は特にそう思う。Air Force III と同様に AF V は各コーナーにアームボードを取り付けるポストがついていて、9 から 12inch のどんなトーンアームにも合わせたアームボードが入手可能だ。このレビュー機は Graham Phantom が付けてあったが私は SAT と各種の SME も使って試聴を行った。

西川氏が述べたように材質の違いにより AF V は、ブラック光沢仕上げの III Premium ほどの‘華やかさ’はない。スタイリッシュで曲線的な Air Force One とは異なり AF Two、AF III、AF V はどちらかと言えば、Audio Research、Manley、EMT 等でお馴染みの‘実質的な’（技術的な）外観で、ファッションブルというよりもむしろ機能的な外観だ。これは‘馬鹿げた遊びが全くないデッキだ’という、確固たる表明だ。

セットアップは簡単で、マニュアルはわかりやすい。しかしメイン/サブブラッターや別筐体 (350×175×270 mm 43 写真参照) のエアポンプ/バキュームを損傷させないようにするためには、一連の作業が必要である。

TechDAS は必要なツール、ホースを付属させている。中でも T 型のハンドルは 6.7kg のアノダイズブラッターを簡単に持ち上げるのに使うが、空気層の底面となるのは滑らかな研磨ガラス製なのでこのツールは不可欠だ。

大型の AF One や AF Two と違って、AF V は取り付けられるアームの数は多くても驚くほどコンパクトだ。ほぼ正方形で、フットプリントはわずか 312 × 368mm だ。もちろん周りにトーンアームを取り付けるスペースが必要なので、400mm 角の隙間におさまるわけではないが、AF III と同様にコンパクトなレコードデッキだ。但し AF III は、傍らにモーターが設置される。

AF III と同様に、AF V はフロントに 33.33 と 45rpm のスピード選択ボタンと Stop ボタン、更にスピードにロックされた際に表示する、デジタルディスプレイがついたコントロールパネルが付いている。ポンプには 1 時間で自動的にシャットダウンする機能がついているので、長期間出かけない限り常にスタンバイにしておくことができる。

**TechDAS**

hifi news review

# Air Force V

## 困惑

バキューム吸着の利点を一度経験してしまうと、レコードクランプを使うしかないデッキに戻るのには難しい。安定性でも歪んだレコードを平らにする上でも、バキューム吸着は申し分ない。高級な重量級のプレスを含め全ての LP を、AF V はしっかりとブラッターに固定した。

DS Audio の DS-W2 のレビューをしたばかりなので、音の記憶を擦るため同じテスト LP を使った。この試聴では、カートリッジは信頼する自前の Koetsu Urushi (KOETSU 光悦) にした。私の愛する SME や Linn LP 12 ターンテーブルと、ダイナミックコントラストにどれだけ違いがあるか、すぐにでも聞いてみたいと思ったのだ。しかしサウンドの性質が異なるので、簡単な答えを望んだとしてもそれほど明らかではなかった。

低レベル情報と低音のオクターブの伸びを調べる私のお気に入りのテストから始めた。サイモン & ガーファンクルの Over Troubled Water 収録曲 The Boxer のスラム音は、バキューム吸着よりも物理的にクランプされた LP のわずかによりタイトな音で対照的な堅固さを獲得した。ここで私は少し困惑してしまった。なぜならバキューム吸着の AF V のほうが幾分 '壮大' には思えたとしても、さらにパフォーマンス、壮大さが重要な性質だと知っている場合、私は妥当でホログラフィックだと思ったからだ。

試聴の際、さらには AF V を聞いた他の機会でも全く変わらず一貫していた特長は、音楽的スペースの規模が非常に大きいことだ。私のリファレンス SME デッキもこの点については優等生であり、楽器の位置をよりタイトに再生する。しかし大きなオーケストラ作品については包括的で AF V に軍配が上がる可能性があると思う。やはり、壮大さを '最上の壮大さ' で表現する。

ここでひとつ指摘しておきたいことがある。SME と AF ターンテーブルは国際的なある事情で、ライバルというよりもむしろ従弟同士である。TechDAS の親会社 Stella は、日本の SME のディストリビューターなので、ショーでは Air Force に SME アームを付けて使用している。彼等は日本で、色々な理由で共存しているのだ。私はなぜ西川氏が互いに排除し合うのではなく、むしろ補完的だと考えているかがだんだん分かってきた。それは、ランボルギーニとフェラーリの違いに似ている。同様にどちらが良いかも、個人の好みの問題だ。

Twisted Sister の Live At the Marquee 1983 のような騒々しいライブアルバムで、AF V は実際のこのクラブ (過去に Marquee に行ったことがあるが本当に納めできる) に近いスペース感を作り出した。同時に群衆のノイズ、Dee Snyder のボーカル、素晴らしいギター演奏が予想を超えて、不意を打たれるほどの鮮烈さで胸に突き刺さってきた。

**TechDAS**

hifi news review

# Air Force V

このバンドの猛烈なパーカッションを聞くと、バキューム吸着によってトランジェントアタックが冴えて音質の違いを聞き取ることができるからお勧めだ。パーカッションによる重みのある打音が私の Yvette のウーファーを震わせ味わい深い演奏となり、AF V はふんだんに空気感を伝えた。

## 恋におちて

私はエアベアリング/レコード吸着に、再び恋に落ちていった。AF III は AF One と AF Two と同じように私を欲求で満たした。Doug MacLeod の Break The Chain をかけると、AF V は上級機に勝るとも劣らない実力があることを見せつけた。価格に比した AF V の価値を考えると、その価値は上がる一方だった。なぜなのか私は、疑問に思った。

年季が入ったリスナーは、実際に聞いている音と好き嫌いの違いを知っている。例えば、マスターテープは権威があっても、家庭でのリスニングには攻撃的すぎる。家庭では過度にディテールがあると、気が散ると思う人もいる。しかし AF V だと、魅惑的な音と注意を惹きつける性能とのバランスが最小限なので、長く聞いても耳に優しい。臨床的すぎる音というはたいてい、短時間のリスニングにこそふさわしい。

MacLeod のトゥワンギーギターとしゃがれたボーカルを、AF V は流れるようなギターの旋律としゃがれた声を完璧にとらえて再生し、'At Last' の Dianne Reeves と Lou Rawls のボーカルや、Buffalo Springfield の 'Bluebird' でほとぼしるギターを思い出させた。AF V はこのように私がこれまで聞いたデッキの中で最高レベルの分析能力を持っているが、臨床的な潔癖さだと非難されない程度に、温かみや'人間味'もあることが分かった。それにまた MacLeod のブルースは、そのような潔癖さで洗い流す必要もない。

'Bluebird' で思い出したので Buffalo Springfield の What's That Sound? をかけて、この素晴らしい曲をもう一度聞いた。このスタジオ録音は音が何層も重ねられて、多くのギターが寄せ集められているので、システム泣かせの一枚だ。最高のラッカー盤でも、とんでもない再生になることもある。しかし、私はこの曲を愛して 50 年経つが、これほど生き生きと再生されたのを聞いたことがない。

## HiFi News 判定

1 つも間違いを犯さないこと:

TechDAS はコストと機能のバランスを取り、ラインナップに完璧にフィットするもう 1 つのターンテーブルをファミリーに加えた。Air Force V が入手できる最高のターンテーブルではない、最高のターンテーブルはやはり Air Force One だ。それを踏まえても AF V は、間違いなく市場で最も価値あるハイエンドデッキの 1 つだ。ボルシェ 911 のオーナーになりたい予算の限られた人が、Cayman が出たときどのように感じたか今の私には良くわかる。  
【音質評価:87%】

**TechDAS**

hifi news review

# Air Force V

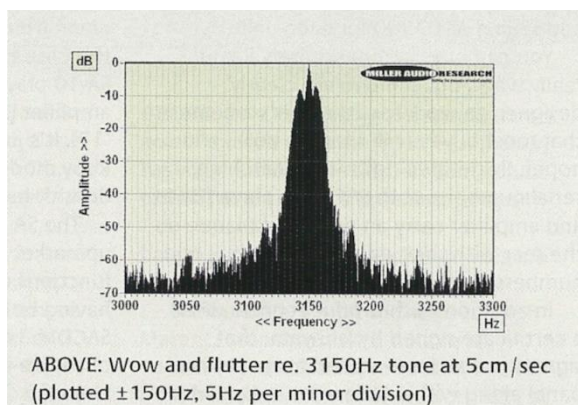
## ラボレポート

AF Vで 33.33/45rpm スピードを指定すると約 20 秒で立ち上がり約 25 秒で 'lock' が表示されるが、'耳で感じられる' 程度に安定したスピードに到達するのはかなり早く、約 7 秒程度である。この点や物理的外観では AF V は驚くほど AF III と似ているが、シャーシには新しい完全一体型モーターアセンブリーが収納されている。ベルトドライブは AF III の合金プラッターより 3.3kg 軽くなった 6.7kg のサブプラッター/プラッターに、緊密結合されている。AF V でもやはり研磨ガラス面にプラッターを置いて、ポンプからの空気がガラス面になめらかに流れ 30 μm 程度回転体を浮上させる。

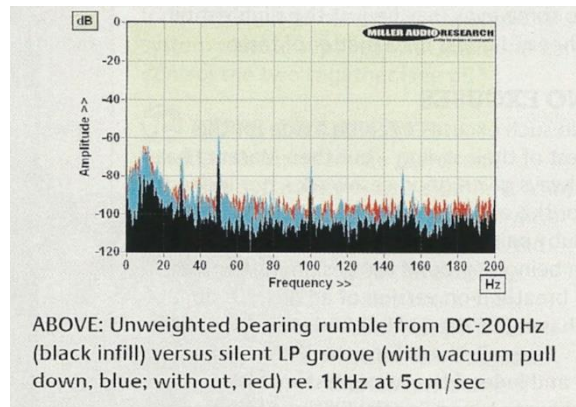
しかし、絶対的なスピード精度は-0.02%(c)と素晴らしい一方、AF V のダイナミックスピード変動は TechDAS 上級機全ての測定値より高い。上級機では高トルクの外部モーターを使っているのに対し、AF V ではシャーシに内蔵されたドライブはピーク重みつけ合計 0.11%という W&F となった。実際、W&F スペクトラムは±6.7Hz 両側波帯に幅が広がっている、いくらか DC ドリフトも見られる。

その点以外では、柔らかいフォームマットがついた AF V のよりシンプルなプラッターは、レコードノイズを抑えるのにより効果的であると思われる。(グループランブルは AF III では-68.6dB に対して-72.1dB である)さらに 72.5dB でもまだベアリングランブルは約 1.5dB 高いのだ。これは素晴らしいことだ。(all DIN B-wtd re. at 5cm /sec)

AF 1、2、3 は全て 30-40Hz の範囲のベアリング/シャーシモードで再生した、AF V の重みなしのスペクトラムでは、30Hz で低レベルモードが 1 つ見られる。(グラフ 2 のブラック/ブルー)ランブル音のレベルは AF V ではより低くなっている。おそらくはプラッター質量が小さいことと、入ってくる空気がより小さいためと思われる。



【グラフ 1】



【グラフ 2】

**TechDAS**

hifi news review

## In the Air Tonight (フィルコリンズのヒット曲の題名)

エアベアリングは何十年もの間設計者たちの心をとらえてきたが、私自身初めてこのテクノロジーを経験したのはスウェーデンの Air Tangent tonearm だった。これは、それまで音みの種だったバラレルロッドをスライドするだけ、あるいはベルトやギアの設定で駆動されていたリニアトラッキングアームの問題を取り除いた。エアポンプを使っている機器はどれも同じだが、複雑さとノイズが問題だった。これらは通常ポンプの位置を工夫することでノイズは軽減されていた。Air Tangent は今でも多くのコレクターにとってこの技術の最高峰であるが、エアベアリングターンテーブルが少なくとも試作機の形で初めて実現されたのは、スピーカーブランド Infinity だった。このアイデアはやはり摩擦を除去すると同時に、アーム/カートリッジ/デッキというメカニカルなつながりによるベアリングノイズと振動を除去することを目的としていた。Maplenoll、スロベニアの新しい Holbo, Bergmann, その他のメーカーが、エアポンプ、あるいはマグネットサポートなどの方法でこの概念を追求している。

**TechDAS**

hifi news review